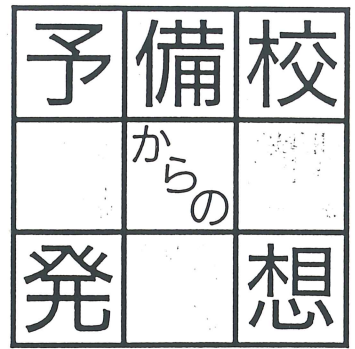




「他者」との出会いの場として

もう数年前のことと思うが、名古屋地区での文化講演会当日、一人の塾生が「今日の講演会終了後、講演者と会談されるのなら、そこに自分も参加させてもらえないか」と申し入れに来た。その時の話の中で彼は、「自分は予備校にくるまで、大人」とまともに話したことがない」と語った。その日、夜の宴席に座を占めた彼は、爆発的に自己を語り、次の企画からは事前準備の手伝いを含めて必ず顔をさせるようになった。

課題の一つとなる。それは、予備校をどのようなイメージに形成するか、即ち、若者にとってどれだけ魅力的な磁場を内部に形成しうるか、ということにつながる。だとすれば、今彼らが飢えているものは何かを見定



河合塾小論文科専任講師

茅嶋洋一

かやしま・ひろかず  
福岡県出身。早稲田大学第一文学部卒。三大教育雑誌の1つ「伝習館」の原告として、20年間にわたり「教育の自由」を訴えてきた。自らを日本人ならぬ九州人と称し、こよなく酒を愛す。

91 ガイドライン/10月号

が、深めるために、多様なジャンルで、今と向き合っている「外の人」を呼んで、様々な講演会やイベントを開催するのである。その道の学術研究者・作家・詩人・評論家・画家・映画監督・ミュージシャン・舞踊家・医者・建築家等々、呼び込む「外の人」は多岐にわたる。

主観性 恣意性を貫く

だが、それらの人選にあたつて、「受験生だからこのくらいの内容と人」とがほどよくある」とか、世間的に著名人だから、といった発想はしない。また、塾生からの要望を一定参考にはするが、表面的要求にそのまま応じるわけではない。講師と事務局からなる委員会のメンバーが、自分自身思い入れや興味があ

め、それを顕在化させ、その充足のための仕掛けと場を意識的に創り出していくことが必須の要件となる。さらに、受験産業という域を超えて、予備校は今様々の教育・文化領域に向けて自己を拡大・多角化させよう

[7]文化イベントのねらいと効果

## "大人"との出会いを仕掛け、発想の転換をはかる

生にぜひそれをおつてみたいと思うテーマや人物を出し合い、討議の上決定する、という主観性・恣意性に貫かれている。これは、内部講師による特別講座やシンポジウム等においても同様である。

それは、先の「大人と出会わなかった」若者や、「出会ってしまった」という思い込みだけで本来的な意味での「他者」を欠落させてきた若者、またそれなりに「他者」と出会ってきた若者、という幾層もの塾生を呼び込み、切り結ぶ場の形成においてその方が有効と考えるからである。

予備校本来の任務の一環として

以上が、受験情報と受験技術の提供者とイメージされる予備校という場において、一見無縁とも思える文化的・遊戯的行事を仕掛けている者達の発想の核をなすところといえよう。しかしまた、小論文入試等に見られる入試の多様化という現況の中で、これらの催しをそれらの入試に対応するための知的刺激・発想の転換・柔軟な思考力の養成等への契機たらしめようという、予備校本来の任務の一環としての位置づけもある。もとより、これらの催しは、小論文科を中心とする有志によって、レギュラーの授業だけでは不足する課題

としている。これらが交差するカオス的情況が、現在のところプラス・カードとして、講師・生徒という関係の場にとどまらない、様々な知的・感性的・思想的な自己啓発と充足の場を若者に用意しているのを見てよ

の考察・発想・構え等の養成のための外部講師による特別講座という名目の下に開始されてきたものを出発点の一つとしている。その延長・発展として現在の展開があるといえる。ちなみに、昨年度（九〇年度）における河合塾全体の催しをみると、外部講師による講演会が三九回、映画（及び講演）が八回、シンポジウム・フリートーク七回、美術展・写真展（及びシンポジウム）三回、コンサート七回。その他、河合文化研究所主催の「文学思想講座」「数学探訪講座」、河合塾講師団による「教養講座」や「ア・ラ・カルト」「オンコチン」講座、あるいは「祭り」や「ウラ版・入塾式」等、バラエティに富んで数多い。

これらは、それにかかわる事務局・講師らの先の想いを核に、公教育の制度外にあることからくる自由さを逆手にとって、公教育の持ちえない（喪失した）教育的磁場を形成しようとする意欲と、受験産業としての予備校の企業戦略とが相まって展開されているともいえよう。

魅力的磁場形成のための仕掛け

予備校間競争においては、客である今の若者をどれだけ惹きつけることができるか、というのが中心的な

からう。

また、講演会等の記録の一部は、参加者からの質疑応答を含めて、「河合ブックレット」として刊行・発売されている。